

1. 白い街

いつもと同じように風が髪を煽る。止めようと思えば止められるが女はいつも風に身を任せていた。この街で一番好きな場所。真っ白な壁の上からは雲海と、直上に涙が出るほどの青い空が見える。たまに雲海が切れ、僅かにその下の様子が見えるのがたまらなく好きだった。

いつかあそこへ行つてみたい。そう願いながらずいふんとは過ぎた。自分に勇気がないのはわかっている。行くなら行けばいいのだ。この街の主にあそこまでの乗り物を願えばいい。そうすれば悩むことはない。そして飽きたら戻つてくればいいのだ。

「……願うことが怖い」

いつからだろう。願えばなんでも叶う街。全ての夢をその手に掴める街。稀に地上からの旅人が来、かの地ではそう呼ばれているのを知ったのに、それを恐れるようになったのは。理由はわからない。わからないのに何かが頭の中で警告する。いや頭の中ではない。この体全てが「願えば必ず叶う」こと

を拒否していた。

分厚かった雲が少し薄くなった。霧がかかったように見えるかの地はこの白い街とは対照的に黒々としている。あれは山と呼ばれて、もう少し時間が経てば次第に緑がかつて来る。もう少し時期が廻れば赤くなる。思い立った時にここまで来ればやはり時が流れていることに気付かされた。

「ここでしか時の流れを実感できないのは……本当に正しいこと？」

今まで風以外にぶつけたことのない疑問が今日も口から出た。残念ながら風はなんの応えも運んでこずただただ女の頬を強くなでていくだけ。

だが今日の風は気紛れだったらしい。頭上から声がかけられた。

「セレスト！」

バサリと風を切る音がして後ろから抱きつかれた。いつものことかと周囲に散る羽根を軽くあしらひ、その腕からするりと逃れて壁際へ。少しでもバランスを崩せば多分下まで超特急で送り届けられるだろう。

彼女の名を呼んだ男はつれない、と呟きつつ背にとつてつけたように生えていた翼を消す。足元に落ちた羽根も全て消えた。

「飽きないね」

「まあな。ガキの頃からの夢だったから」

男はわざとまた翼を出し大きく広げて見せた。

「そもそも飽きるほど時間経ってない」

「一月もたつてたら十分だと思ふけど」

「そんなに経つてたか？ 全然気にしてなかったよ」

機嫌よく笑う男にあきれた笑みを見せるセレスト。

「そう」

そつけない男に返事をしてたはずつとかの地、地上を眺める。一瞬雲が完全に途切れそうになつたがまた厚い雲海となりつつあつた。

「そつちも飽きないんだな」

「まあね。子どもの頃からの習慣だから」

「……そりゃ筋金入りだ」

男が肩を疎めるのが心配でわかつた。というよりこのやりとり自身も、彼女が彼の翼について振つた時に必ずされるやり取り。ここに来てから一月の間、繰り返される一種の儀式のようなものだった。

「ところでセレスト、今日はあの塔の近くまで飛んでみようと思ふんだ」

振り返ると男がアクシスを指している。今日はあの周辺が雨のようで薄暗く曇つていた。

「雨みたいよ」

「だからいいんじゃないか。俺、雨好きなんだ。セレストは？」

「……別に、嫌いじゃない」

その答えに男がにこりと笑つた。セレストよりいくらか年上と聞いているがこう笑うとひどく幼く見える。そもそも、

「翼が欲しい」という幼い頃からの願いをかなえるためにこの街まで旅をしてくる人間だ、周りは幼いと笑つていた。けれどその幼い笑みは優しい笑み。地上のどこから来た風変わりな地上人。その名は、この街では書物の中にしか残っていない響きだ。風貌もどこか違う感じがする。

地上のどこからきたのか良くわからないハンス。そもそも夜に外壁上から下をみても、人の営みを示す灯かりは僅かにも無い。では、この都市が見える場所から来たのではあるまい。本人もどこをどうやってきたのか良くわからないと、初めて会つたその日に呟いていた。

「じゃ、一緒に行こう。俺は君と一緒にいられると嬉しいんだ」

「……わかつた」

笑顔のまま差し出される手を握る。

「じゃ、行こう。……跳ぶ！」

刹那、ハンスの背に大きな純白の翼が浮かぶ。それは直前まで存在しなかつたあり得ないものだが、今このときは存在している。彼の思うとおりに動き、空を舞う。セレストも合わせて願う。己の体がこの翼に合わせて舞うことを。

翼が羽ばたき羽根があたりを舞い始める。セレストとハンスは申し合わせたように同時に地面を蹴る。と、重さなど無

いように蒼穹へ向かつて真っ直ぐ上り始めた。高く高く。呼吸すらままならぬ高さまで一気に。蒼が消え夜の闇すら見えたままにして上空を流れる強い風に身を任せた。

「今日も凄い風」

「この風はいつも一定方向に向いている。クレイドルから跳ぶにはこいつに乗るのが一番早い」

「……そうなんだ」

ハンスの意外な知識にドキリとする。いつもは翼を得て子どものように飛び回っている男だが、自分とはまったく違う道を歩いてきていると実感するのはこういうときだ。

「ここに来てから何度もここまで上がってきたからね。もつと上へ行ってみたいんだけど、下手にこいつに乗ってしまうとこの街の……環の圏内から振り飛ばされそうであまり長居する気が起きなくて」

「……それなら環に止めてもらえば？」

言つて後悔した。ハンスがそれに乗ってくれないよう祈る。

「うーん、それはいい」

気づかれないようにそつと息を吐くセレスト。

「どうせだから自力でどうにかできないか、まずやってみるつもりだ」

そうだった。この男はそういう考えの持ち主だった。自分に鳥のような大きな翼を生やすことだけは、自分の力でどう

にもならないのでここに来たのだった。

「そっか……うん、そうだね」

変わっていない。初めて会つてから彼は変わっていない。まだ。

はるか上空の人工降雨装置から雨として降っては来ているがこの中身はバクテリアが仕込まれていると聞いている。とはいえ特に気になるものでもなく、人の体内に入るとすぐに分解してしまう。何のために混ぜられているのかとかつて親に聞いたら植物の病気防止らしい。そのうちしつかりと調べてみたいと思つて時が過ぎた。

「そろそろ高度下げよ。どうにも雨と翼の相性が悪い」

「ああそれ……昔ちよつとかじつたけど、その翼を構成して物が雨の中のバクテリアと反発しあつて、人工物である翼のほうを負けるつて」

「……なるほど……おつとちようどいい広場がある。雨に当たれても構わないか？」

「最初から嫌だったら誘いに乗ってないよ」

「ん。じゃ雨に濡れつつ一休み」

はるか上空へ伸びるアクシスピラーの途中で等間隔で荷物置き場と搬入口が作られている。いつもは日に三回、塔内で使用する物資が運び込まれていた。けれど雨の日はその休むので荷物置き場は静かだった。

「ここが座りごち良さそうだ」